

バランスの良い食事で  
免疫力 UP! 毎日果物  
200g食べましょう。

## 特集

・モモとニホンスモモの  
栽培品種の動向と農研  
機構における育種の状  
況

p1

## 中央果実協会からのお知らせ

・農林水産祭「実りのフ  
ェスティバル」への出展

P4

・世界の生食用ぶどう  
産業

p5

・令和3年度果樹農業  
生産構造分析調査のア  
ンケート分析結果

p7

## 業務日誌、人事異動

p8



## 特集

### モモとニホンスモモの栽培品種の動向と農研機構に おける育種の状況

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹茶業研究部門  
品種育成研究領域 落葉果樹品種育成グループ 主任研究員 八重垣英明

#### I 主要果樹の結果樹面積の推移

表1に農林水産省の統計による主要果樹の2011年と2021年の結果樹面積を示しました。

全ての果樹において結果樹面積が減少していますが、リンゴ、ブドウ、モモ、オウトウ、スモモ(ニホンスモモおよびヨーロッパスモモ)は減少率が10%未満と比較的緩やかな減少となっています。減少が少ない果樹は多い果樹に比べて、経営および栽培環境が良好であると推察されます。本稿ではモモとニホンスモモの主要品種の動向と農研機構における新品種育成の状況について紹介します。

表1 主要果樹の結果樹面積の推移

樹種	結果樹面積(ha)		減少率 (%)
	2021年	2011年	
ミカン	37,000	45,300	-18.3
リンゴ	35,300	37,800	-6.6
カキ	18,100	22,100	-18.1
クリ	16,800	21,400	-21.5
ブドウ	16,500	17,800	-7.3
ウメ	13,800	16,600	-16.9
ニホンナシ	10,300	13,700	-24.8
モモ	9,300	9,980	-6.8
オウトウ	4,260	4,440	-4.1
スモモ	2,680	2,970	-9.8
キウイフルーツ	1,880	2,250	-16.4
セイヨウナシ	1,400	1,590	-11.9
ビワ	950	1,600	-40.6
パインアップル	308	345	-10.7

農林水産省「作況調査(果樹)」参照  
スモモにはニホンスモモとヨーロッパスモモが含まれる

#### II モモの主要品種の動向と農研機構の育 種

##### 1 主要品種の動向

表2に農林水産省の統計によるモモの主要品種の栽培面積の推移を示しました。2007年から農研機構育成の「あかつき」が栽培面積第1位となっています。

1988年に上位だった、「倉方早生」、「山根(愛知)白桃」、「砂子早生」、「大久保」、「白桃」、「武井白鳳」、「布目早生」は大きく減少し、2019年での栽培面積はわずかとなっています。1位だった「白鳳」も半分以下となっています。減少した品種は、日持ち性、糖度、栽培性などが勝る新品種などに置き換わりました。その結果、2019年の上位20品種のうち12品種は1988年の統計には記載されていない品種となっています。

現在の主要品種は、中生の「あかつき」と「白鳳」、晩生の「川中島白桃」、早生の「日川白鳳」の4品種です。1995年からこの4品種の合計が全体の40%以上を占め、その前後をその他の品種で埋める状態が続いています。2010年に55%を占めるまでに至りましたが、以降は減少しています。

モモは1樹の収穫期間が1週間から10日程度ととても短く、貯蔵してから販売されることもありません。そのため、収穫労力の確保が1品種の栽培可能面積を決めますが、労力一人当たり10a程度が目安となります。よって、労力2人のモモ専業で

1.5ha程度経営する場合、収穫期の異なる7～8品種を栽培する必要があります。さらに、モモは他の果樹に比べて産地ごとの主要品種の多様性が高い特徴もあります(表3)。そのため、2019年の特産果樹生産動態等調査に記載されているモモの栽培品種は89品種で、ウンシュウミカンとリンゴには及ばないもののブドウ、カキ、ニホンナシよりも多い品種が栽培されています。

この中で近年栽培が増えている品種は、「なつっこ」、「まどか」、「夢みずき」、「おかやま夢白桃」、「さくら」、「幸茜」です。「なつっこ」以外の品種は2004年の統計にも記載されていませんでした。いずれも従来の同時期に収穫される品種よりも果実が大きい、果肉がしっかりしていて日持ち性に優れるなどの特性を持っていて、更なる増加も期待されます。

## 2 モモの果実における質的形質

このようにモモは多くの品種が栽培されていますが、消費者の品種名の認知度は低い傾向にありました。10年程度前までは小売店で品種名が記載されていないか『〇〇県産(白)桃』などといった記載が多かったことが影響していると考えられます。これは一品種の流通期間が短いことや、外観や食味が似ている品種が多いため詳細な記載を省略していたと考えられます。

表4にモモの果実における質的形質(不連続で質的な違いとして示される形質)を示しました。7形質存在しますので、単純なかけ算ではモモの果実は128タイプ存在することになります。しかし、実際に栽培・流通しているモモは、丸く、果皮に毛じがあり、赤く着色した外観で、白肉で、樹上および収穫後に軟化する溶質の肉質を持ち、酸味が少ない果実が80%以上を占めています。

2019年の上位20品種の中では黄肉の「黄金桃」、遮光袋を果実にかけて外観を白く仕上げた「清水白桃」や「おかやま夢白桃」などが異なるタイプと言えます。

近年増えてきているインターネットなどを利用した直売においては品種名やその特徴を詳しく紹介されるようになってきました。小売店での品種名の記載も増えてきています。そのため今後は、消費者のモモの品種に対する認知度は向上するものと思われれます。

表2 モモの主要品種の栽培面積の推移

品種	栽培面積 (ha)		
	2019年度	2004年度	1988年度
あかつき	1,381.5	1,540.9	483.9
白鳳	1,069.1	1,686.3	2983.0
川中島白桃	1,049.3	1,295.8	352.1
日川白鳳	577.7	954.5	269.4
なつっこ	460.9	37.0	—
清水白桃	310.8	450.3	360.2
まどか	214.2	—	—
浅間白桃	191.9	505.5	325.0
夢みずき	140.4	—	—
加納岩白桃	130.2	206.2	32.3
おかやま夢白桃	95.7	—	—
黄金桃	91.6	111.2	—
さくら	87.7	—	—
嶺鳳	77.9	63.1	—
一宮白桃	73.9	251.2	—
幸茜	73.5	—	—
ゆうぞら	65.9	168.1	77.4
みさか白鳳	65.5	121.3	—
川中島白鳳	63.5	174.6	—
暁星	60.5	100.6	—
倉方早生	3.7	26.4	1077.7
山根(愛知)白桃	28.9	405.3	694.8
砂子早生	—	13.2	667.5
大久保	38.7	301.4	456.1
白桃	14.9	86.0	416.5
武井白鳳	1.4	66.6	384.5
布目早生	—	5.7	263.7

農林水産省「特産果樹生産動態等調査」および「果樹栽培状況等調査」参照

表3 モモの主要産地と主要品種(2019)

県名	総栽培面積 (ha)	主要品種(栽培面積 ha)
山梨	3,120	白鳳(517)・日川白鳳(338)・なつっこ(309)
福島	1,590	あかつき(781)・川中島白桃(200)・まどか(173)
長野	990	あかつき(225)・川中島白桃(218)・なつっこ(99)
和歌山	708	白鳳(282)・日川白鳳(108)・川中島白桃(81)
岡山	626	清水白桃(227)・白鳳(109)・おかやま夢白桃(96)
山形	615	川中島白桃(216)・あかつき(117)・まどか(32)

農林水産省「作況調査(果樹)」および「特産果樹生産動態等調査」参照

表4 モモの果実における質的形質

形質	優性(顕性)	劣性(潜性)
果形	平	丸
果皮の毛じ	有	無
果皮の赤着色	有	無
果肉色	白色	黄色
果肉の軟化	有	無
肉質	溶質	不溶質
酸味	少	多

### 3 農研機構におけるモモ育種

農研機構におけるモモ育種は、従来の主力タイプである白肉溶質モモの果実品質および栽培性の向上を主要な育種目標としてきました。近年はこれに加えて、果実形質や栽培性の多様化を図れるモモを育成することにも重点を置いています。

2009年以降に「ひめこなつ」、「つきあかり」、「つきかがみ」の黄肉溶質品種を品種登録しました。ここ数十年のモモの品種登録全体に占める黄肉品種の割合は30%程度となっていますので、現在数%程度の黄肉モモの栽培が増えることが期待されます。

モモの栽培・流通上の大きな問題点として果実の日持ちの短さがあります。これまで溶質の中でより日持ち性の良いものを選抜してきましたが、より長い日持ち性を得るために、不溶質や硬肉の新品種育成を目指しています。

軟化が緩やかで弾力のある肉質の不溶質(ゴム質)の品種は、これまで缶詰加工用品種でした。これらの品種は糖度が低いものが多く、現在まで生食利用を主とした不溶質品種はほぼありませんでした。新たなタイプのモモ品種として生食用不溶質品種の育成を進めています。

収穫後にほぼ軟化をしない硬肉品種は既に「美晴白桃」、「おどろき」などが栽培されていて、硬いモモが好きな消費者により指名買いされています。山梨県果樹試験場が育成して2019年に品種登録された「甲斐トウ果17」(商標登録「夢桃香」)も普及し始めています。これらに続く硬肉新品種の育成を目指しています。

農研機構で育成した「ひめこなつ」と「ひめまるこ」(白肉)は満開後60日前後で収穫される極早生品種です。従来の極早生主要品種の「ちよひめ」、「はなよめ」より10日程度早く収穫できるため、西南暖地では5月末から出荷できる産地もあります。極早生品種は収穫労力の分散と台風被害のリスク低下が図れるとともに、露地栽培モモの流通期間の拡大が可能となります。

### Ⅲ ニホンスモモの主要品種の動向と農研機構の育種

#### 1 主要品種の動向

表5に農林水産省の統計によるニホンスモモの主要品種の栽培面積の推移を示しました。

わが国のニホンスモモは「大石早生すもも」と「ソルダム」が中心を占める状態が長く続きました。1988年には両品種で栽培面積の62%を超えていましたが、その後減少が続き2019年では1位と2位の座は守っているものの合計で28%と半減以下となっています。その他の主力品種の「サントローザ」、「ガラリー(花螺李)」、「メスレー」、「大石中生」、「ビューティー」、「七郎」も大きく減少しています。いずれも『スモモ』の名の通り酸味のある食味の品種です。近年の酸味を敬遠する指向の強まりの影響を受けたと考えられます。

1988年以降に栽培が増えた品種は「太陽」、「秋姫」、「貴陽」、「サマーエンジェル」、「サマービュート」、「サンル

ージュ」、「菅野中生」です。いずれも従来のニホンスモモ品種よりも、糖度が高く酸味が少ないものです。上位2品種の栽培が大きく減少しましたが、これらの品種が増加したことにより、栽培面積の減少割合が他の果樹よりも低くなりました。

特に「貴陽」は、『世界一重いプラム』としてギネス世界記録に認定されるほど大玉でさらに食味も良いため、贈答品に使われるなど従来のニホンスモモのイメージを変えたとも言われています。しかし、「貴陽」は三倍体であることから人工受粉をしても結実が非常に不安定になりやすいことなどから2014年以降は栽培が減少しています。「貴陽」の親である「太陽」も「貴陽」ほどではないですが結実が不安定であることなどから減少しています。

今後も酸味が多い品種から、酸味が少なく糖度の高い品種への移行は続くと考えられます。

#### 2 農研機構育成品種「ハニービート」

農研機構では酸味が少ないニホンスモモの育種を行っています。これまでに「ハニーローザ」と「ハニーハート」の2品種を育成しましたが、果実が小さいことなどから普及は限定的でした。

表5 ニホンスモモの主要品種の栽培面積の推移

品 種	栽培面積 (ha)		
	2019年度	2004年度	1988年度
大石早生すもも	498.5	859.9	1089.8
ソルダム	273.2	645.2	957.3
太陽	179.2	235.4	123.7
秋 姫	94.5	36.3	-
貴 陽	87.9	40.7	-
ガラリー(花螺李)	67.7	109.1	148.6
サマーエンジェル	65.9	-	-
サントローザ	52.5	143.8	630.9
レートソルダム	22.3	44.8	47.1
紅りょうぜん	17.3	36.9	-
大石中生	16.4	51.4	93.4
サマービュート	13.6	-	-
サンルージュ	13.0	-	-
菅野中生	12.3	-	-
メスレー	-	31.6	95.2
ビューティー	3.4	33.5	80.6
七 郎	-	-	45.3

農林水産省「特産果樹生産動態等調査」および「果樹栽培状況等調査」参照

近年、果実が大きく糖度が高く酸味の少ない「ハニービート」を育成しましたので、その特性を紹介します。「ハニービート」は農研機構の選抜系統であるPP-26-6(「ソルダム」×「オザークプレミア」)に「太陽」を交雑して得られた実生から選抜しました。

表6に「ハニービート」の育成地(茨城県つくば市)での特性を示しました。開花盛期は3月30日頃です。収穫盛期は7月12日頃で「大石早生すもも」より22日遅いですが、「ソルダム」より11日早いです。果形は円形で一部果頂がやや尖ります。果皮は紅紫色に着色し、果肉は黄色です。果実重は128g程度でやや大きいです。果汁の糖度は15.5%程度と高く、pHは4.4程度と低いです。この時期に収穫できるニホンスモモとしては食味良好です。黒斑病には罹病性ですが、「大石早生すもも」や「秋姫」などよりも発生が少なく、「ソルダム」と同程度となります。

酸味が少なく甘いことから「ハニー」、黒斑病に強いことから「ビート(beat=撃退する)」、あわせて「ハニービート」と命名しました。

これまでの酸味が少なく糖度が高いニホンスモモ品種は中生から晩生の品種がほとんどでした。よって、これらの品種の露地栽培の果実が流通し始めるのは7月上旬頃でした。そのため、6月上旬頃から西南暖地の産地から出荷が始まった露地栽培の「大石早生すもも」が産地リレーをしながら7月頭まで流通していました。従来の低酸高糖度品種より早く収穫できる「ハニービート」が普及することで、良食味品種の流通開始時期が早まることが期待できます。

#### IV おわりに

果樹生産を維持していくためには、従来の品種よりも果実品質や栽培性の優れた特徴のある新品種が出続けることが重要です。農研機構は今後も優良な新品種の育成を続けて参ります。

表6 「ハニービート」の特性

品種	開花盛期	収穫盛期	果形	果皮色	果肉色	果実重 (g)	糖度 (%)	酸度 (pH)
ハニービート	3月30日	7月12日	円	紅紫	黄	128	15.5	4.4
大石早生すもも	3月29日	6月20日	円	紅	淡黄	80	11.2	3.3
ソルダム	3月30日	7月23日	円	紅	濃紅	129	13.3	3.8

(農研機構 2014-2016)



写真:ハニービートの結実状況

### 中央果実協会からのお知らせ

## 第61回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

—需要促進部—

11月11日(金)、11月12日(土)の2日間にわたって、東京都豊島区の池袋サンシャインシティにおいて第61回農林水産祭「実りのフェスティバル」が開催され、中央果実協会もブース出展をしました。

当協会のブースでは、「毎日くだもの200グラム運動」の理解増進のため、パネルやポスターの展示、クイズのほか、手のひらを測定器に30秒当てて皮膚のカロテノイド量を測定し、野菜の推定摂取量を推定するベジチェックの体験コーナーを設置して楽しんでいただきました。クイズに

お答えいただいた方やベジチェックの測定をしてくださった方に「毎日くだもの200グラム」推進の缶バッジをプレゼントし、特にお子さんたちに大好評でした。

今年は、新型コロナウイルス感染症の影響で3年ぶりの開催でしたが、各県のブースでは、様々な特産品をはじめ、秋の代表的な味覚の柿やぶどう、りんごやみかんなどが山盛りされ、多くの方が試食、試飲をしたり、お気に入りの特産品などを買い求めて大盛況の様子でした。



## 世界の生食用ぶどう産業

### —情報部—

近年、わが国の生食用ぶどうは、栽培面積、収穫量とも減少していますが、シャインマスカット人気もあり価格は上昇しています。一方、海外からの輸入量急増、海外市場では強力な輸出国との競争等、大きな変化に見舞われています。

海外で生産され輸入される欧州ぶどうについては、品種動向や栽培流通技術の実態については整理が不十分であり、まとまった調査が行われていません。また、世界最大のぶどう生産国となった中国の栽培技術や輸出を強化しているペルーの動向も関心がもたれるところです。

このようなことから、海外果樹情報収集・分析調査の一環として、令和3年度は、世界の生食用ぶどう産業、特に品種動向と栽培流通技術について調査報告書として取りまとめることとしました。詳細は、ホームページをご覧ください。

### 世界の生食用ぶどう産地と輸出

生食用ぶどうの生産量が多い国は、中国、トルコ、インド、エジプト、イラン、ウズベキスタン、イタリア、米国、チリ、アフガニスタン、ブラジル、ペルー、アルジェリア、モロッコ、南アフリカ、スペイン、ギリシャ、メキシコです(図1)。

世界の輸出量は増加傾向であり、輸出量の多い国はチリ、イタリア、米国、南アフリカ、ペルー、中国、オランダ、トルコ、スペイン、メキシコ、インド、オーストラリアです(図2)。

輸出先は、距離的に近い大消費地に出荷されることが多い傾向ですが、チリ、ペルーは、米国、中国、欧州等世界各地に出荷しています。出荷時期は地域によって異なりますが、世界的に見ると周年を通して供給されています。



図1 世界の生食用ぶどう栽培面積

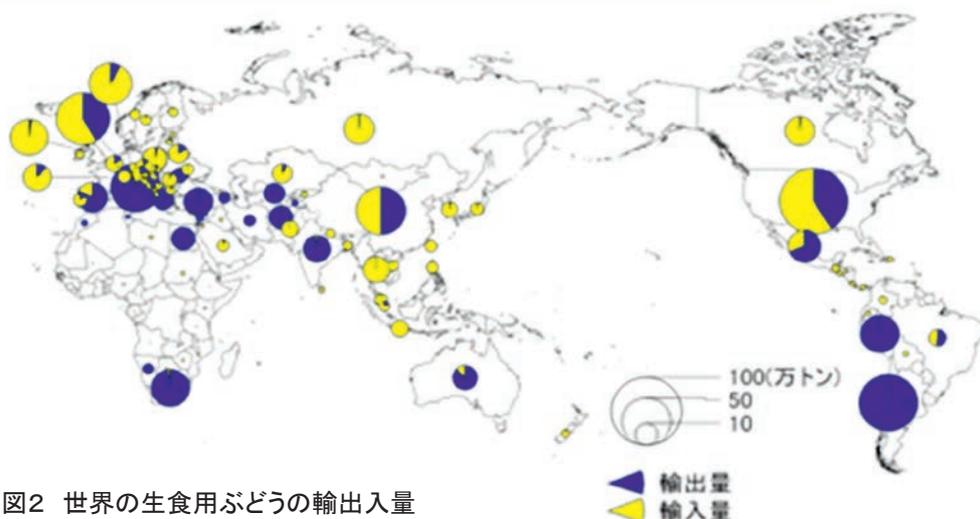


図2 世界の生食用ぶどうの輸出入量

### 欧州ぶどうとアメリカぶどう

生食用ぶどうの産地は、生育期の平均気温と降水量とにより、欧州ぶどうの産地とアメリカぶどうの産地に分けられます。東アジアを除き、世界の主要産地は乾燥地や半乾燥地にあり、欧州ぶどうが栽培されています。欧州ぶどうは、果肉が噛み切りやすく、マスカット香あるいは無香であり、果実の日持ちが長く、耐病性、耐寒性が弱い傾向です。

世界で栽培される欧州ぶどうの多くは、カリフォルニア州の公立機関で育成された品種でしたが、近年、民間育種企業により市場で望まれる無核、噛み切りやすく、高糖度、香りのよい品種が多数育成されるようになってきました。東アジアを除いて世界で新植されている品種の多くは、4つの民間育種企業の品種で占められています。こうした新品種、商品名の使用は、権利を持つ育種企業の許可を得る必要があります、育種企業の影響力が増えています。

欧州ぶどうは、乾燥地、半乾燥地で栽培されることから、水源の確保と精密な水管理が必要です。

### ぶどう生産の労働時間と栽培流通技術

生食用ぶどう栽培の労働時間は他の果樹や醸造用ぶどうと比べても非常に多く、収穫調製、果房管理等は機械化が困難です(図3)。

日本で独自に開発発展してきた技術として、施設栽培、雨よけ栽培、休眠打破技術、二期作、ジベレリン処理による無核・大粒化技術等がありますが、これらは世界に幅広く普及しています。

生食用ぶどうは、高温低湿条件では水分が失われ急速に品質が低下します。そのため、すみやかに予冷し、海外ではカビ防止の二酸化硫黄処理を行います。輸出や消費地が遠い場合は、コールドチェーンで流通する必要があります。

### 主要生産・輸出国の動向

カリフォルニア州は、米国で最大の生産州であり、生食用ぶどうの育種、栽培・流通技術をリードしてきました。同州の生食用ぶどうの生産額は単価上昇により2012年以降顕著に増加しています。その要因として、消費者の嗜好に合う新品種の導入が進んだことが考えられます。幅広い

料理メニューの提供や健康スナックとしての宣伝を活発に行い、積極的に消費拡大に取り組んでいます。

チリは、生食用ぶどうの最大の輸出国ですが輸出量は減少傾向です。その要因には、出荷時期の早いペルーとの競合、都市化、経営的に有利なサクランボへの移行、古い果樹園が多く移植に経費がかかること、干ばつや異常降雨、新品種への更新の遅れがあります。

ペルーは、グローバルバリューチェーンにより急速に生食用ぶどうの輸出大国となりました。また、好適な気象条件、最大の輸出先である米国に近いこと、米国、欧州、中国等の流通量が少なくなり始める頃から

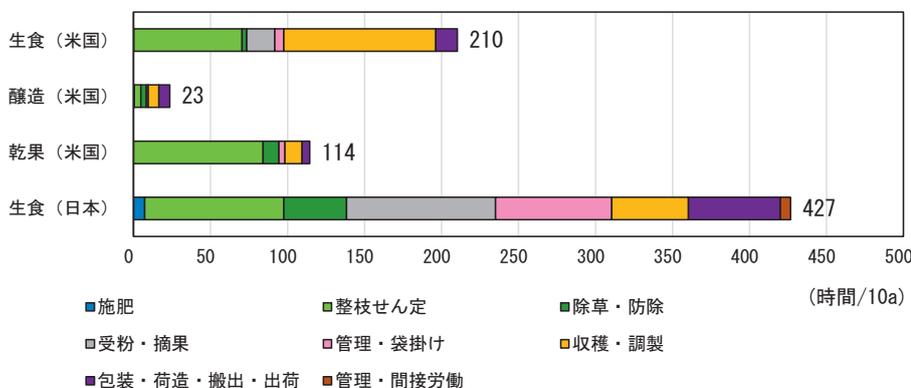


図3 米国の生食用、醸造用、乾果用ぶどうの労働時間と日本のぶどう労働時間

他の主要輸出国に先駆けて出荷が可能等、気象的にも地理的にも優位な位置にあります。課題としては、地下水に依存する水資源の確保です。

**中国**は、世界最大の生食用ぶどう生産国です。生産量の増加には、全国的な栽培拡大、特に、適地とされる新疆ウイグル自治区の面積拡大とともに従来栽培が困難であった南部地域への二期作栽培や雨よけ栽培の普及が寄与しています。また、日光温室等の施設栽培も普及し、これら技術により生産量の増加、出荷時期の拡大が進んでいます。シャインマスカットも急速に拡大しています。

**南アフリカ**は、伝統的にしっかりとしたグローバルバリューチェーンを持ち、生食用ぶどう輸出競争力が強いです。欧州市場に強く、アジア市場の開拓にも力を入れています。

**オーストラリア**は、アジア向けの有力な輸出国です。比較的古い品種が多く、新たな品種を求めています。シャインマスカットを交配親とした品種が導入され始めています。

**イタリア**は、欧州最大の生産国です。2000年代初めころまでは欧州市場で競争がない状態であり、品種を含め伝統的な栽培が多く、新技術の導入が遅れました。施設栽培、ネット栽培が普及しています。有核品種の割合が多く、消費者の人気の無核品種に移ってきていることからその対応が課題です。

**スペイン**は、EUでイタリアに続く第2位の生産国です。新品種の移行が最も進んでいる輸出国で、イタリアに比べ高値で取引されています。

**インド**は、有数の生食用ぶどう生産国で、出荷時期は北半球にありながら南半球の生産国に近いという特徴があります。熱帯、亜熱帯地域に産地があり、二期作栽培、二度切り栽培が行われています。輸出サプライチェーン関係者を統合したネットワークシステムがあり、小規模生産者でも輸出に取り組みやすくなっています。

**トルコ**は有数の生産国で、有機生産大国でもあります。輸出先はロシア、ウクライナが多いですが、有機生食用ぶどうは欧州向けです。

**メキシコ**は、休眠打破剤を使うことによりカリフォルニアより先に出荷できるようになった産地です。主要産地は雨の少ない乾燥地であり地下水に制約があるため、面積拡大は困難で面積当たりの収量増加を目指しています。

**ブラジル**の産地は熱帯地域にあり、二期作栽培が普及しています。海外の新品種の適応性が低いこともあり、独自品種の育種が行われています。

**韓国**の栽培品種の半分は生食用として品質の劣るキャンベルアーリーです。シャインマスカットの価格は高く、輸出用品種もほとんどがシャインマスカットであることから、その栽培面積は今後も拡大していくことが考えられます。

## 令和3年度果樹農業生産構造分析調査のアンケート分析結果 —情報部—

令和2年4月に公表された果樹農業振興基本方針に即して、都道府県の果樹農業振興計画や果樹産地構造改革計画の策定が進められています。

そこで、果樹産地協議会における果樹産地構造改革計画の実践状況を産地協議会にアンケートを行い調査しました。調査結果については、令和3年度果樹農業生産構造分析調査報告書に記載されています。詳細は、ホームページをご覧ください。

### アンケートの概要

当協会が、産地計画をもとに、かんきつ類、りんご、ぶどう及びその他の果実を主として栽培する120産地協議会にアンケート調査票を送付し、115の回答を回収(回収率95.8%)しました。アンケート調査票では、果樹産地構造改革の園地・人材戦略、生産戦略、流通・販売戦略等に即した合計16の設問について、産地協議会の取り組みとして「①相当行っている」、「②やや行っている」、「③あまり行っていない」、「④行っていない」の4択で回答を求めました(栽培技術の習得の取り組み(問2)は「はい」、「いいえ」の2択)。

アンケート回答の集計は、それぞれの設問への回答の実数と割合(%)を求めるとともに、設問間でのクロス集計を行いました(表)。

表:実施した主なクロス集計とその狙い

主なクロス集計	クロス集計の狙い
新規就農等担い手育成の取り組み(問1)の回答が①の産地協議会の他の回答の割合(%)	新規就農等担い手育成の取り組みに積極的な産地協議会が経営継承、園地集積・集約、生産性向上対策等ほどの程度取り組んでいるかを分析

### 特徴的な集計結果

#### 1. 多くの産地協議会が、新規就農等担い手育成の取り組みに積極的であり、担い手への栽培技術習得の取り組みにも熱心

新規就農等担い手の育成の取り組みについて、回答①の割合は31%、回答②の割合は52%で、両者の合計が83%であり、回答した産地協議会では、担い手の育成・確保の取り組みが積極的に行われていることが伺えます。

また、担い手への果樹栽培特有の栽培技術習得の仕組みが「ある」と回答した割合が72%となっています。

新規就農等担い手育成の取り組みへの回答が①の産地協議会に限って見ると、実に90%超が技術習得の仕組みを有しています。

他方、同質問への回答が③又は④の産地協議会について技術習得の仕組みがあるとの回答は27%と低くなっています。

**(公財)中央果実協会**

編集・発行所  
公益財団法人 中央果実協会  
〒107-0052  
東京都港区赤坂 1-9-13  
三会堂ビル 2F  
電話：03-3586-1381  
FAX：03-5570-1852

編集・発行人  
今井 良伸  
印刷・製本  
(有) 曙光印刷



Web サイト  
URL:  
[www.japanfruit.jp](http://www.japanfruit.jp)

**お知らせ**

毎日くだもの 200 グラム運動  
メールマガジン「くだもの&健康  
ニュース」を発刊しています。

多くの方の読者登録をお待ち  
しております。

メルマガの読者登録方法は  
当協会下記ホームページをご  
覧下さい。

<https://www.japanfruit.jp>

**2. 新規就農等担い手育成に比べて経営継承への取り組みは全体的にみると弱い、担い手育成に積極的な産地協議会に限ると割合は3倍に増加**

樹体を含めた園地と経営の継承をセットでの取り組み(問3)や、経営継承後の経営安定への取り組み(問4)については、回答①の割合が各10%強で、前述の新規就農等担い手育成の取り組みの割合と比較すると3分の1と取り組みが弱くなります。

新規就農等担い手育成の取り組みの回答①の産地協議会に限って見ると、経営継承の取り組みの回答①の割合が31%と全体の回答と比べて3倍程度増加します。

**3. 担い手への園地集積・集約化の取り組みは一定程度あり、新規就農への取り組みが園地集積・集約の取り組みを押し上げる効果**

担い手への園地集積・集約化の取り組み(問5-1)については、回答①の割合が15%です。新規就農等担い手育成の取り組み(問1)の回答が①の産地協議会に限ると、園地集積・集約化の取り組みの回答が①の割合は24%に増加します。

**4. 省力樹形や機械作業体系の導入に産地協議会は積極的に取り組む**

省力樹形や機械作業体系の導入の取り組み(問6)の回答が①の割合は22%で、回答②も合わせた割合は78%になります。他方、園地基盤整備の取り組み(問7)の回答が①の割合は12%、回答が①又は②の割合は61%と省力樹形等の導入に比べると割合が低くなります。

新規就農等担い手育成の取り組みの回答が①の産地協議会に限ると、省力樹形や機械作業体系の導入の取り組みの回答が①の割合は43%と倍増するのに対して、園地基盤整備の取り組みの回答が①の割合は減少して5%となります。

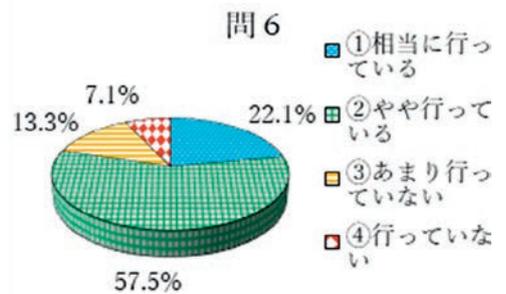


図 省力樹形等の取り組みの回答に係る産地協議会の構成比

**業務日誌、人事異動**

(業務日誌)

- 4. 10. 5 第3回センサス調査検討委員会 (於 三会堂ビル)
- 4. 10. 14 果樹農業研究会現地調査 (於 長野県)
- 4. 10. 16~17 果樹農業研究会現地調査 (於 広島県)
- 4. 10. 24~25 果樹経営支援対策事業等実施評価委員会現地調査 (於 青森県)
- 4. 10. 25 第24回全国果樹技術・経営コンクール第1回審査会 (書面審査)
- 4. 10. 27~28 落葉果樹連絡協議会 (於 山形県)
- 4. 11. 1~2 果樹農業研究会現地調査 (於 山口県)
- 4. 11. 10~11 九州地区果実生産出荷安定基金協会連絡協議会 (於 佐賀県)
- 4. 11. 11~12 令和4年度農林水産祭「実りのフェスティバル」に出展 (於 池袋サンシャインシティ)
- 4. 11. 17 第24回全国果樹技術・経営コンクール第2回審査会 (於 三会堂ビル)
- 4. 11. 17 食育セミナー (於 東京・東京農業大学)
- 4. 11. 18 中間監事監査 (於 三会堂ビル)

**農林水産省農産局園芸作物課**

新	日付	名前	旧
業務推進専門職	4. 10. 1	井ノ口修司	消費・安全局植物防疫課企画班企画係長
農林水産技術会議事務局研究調整課調整班法人調整係長	4. 10. 1	竹内 和哉	園芸流通加工第1班流通調整係長